

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370874

研究課題名(和文) フランス植民地史研究と歴史認識 - サハラ以南アフリカを手がかりに

研究課題名(英文) France's Colonial History and its Perceptions --- Focusing on Sub-Saharan Africa

研究代表者

平野 千果子 (HIRANO, Chikako)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00319419

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、植民地支配の過去をめぐる歴史認識について、フランスを事例に考察したものである。日本に比すると、フランスはアルジェリアを除けば旧植民地からの批判にさして直面してはならず、そもそも植民地支配の過去が必ずしも「負」の歴史と捉えられているわけでもない。本研究では、フランス植民地のなかでも独立前から親仏的傾向が強いサハラ以南アフリカに注目し、社会史的手法によって、本国側の認識がいかに形成されていったかを考察した。

研究成果の概要(英文)：This research examines French perceptions of its past colonialism. Unlike Japan, where there has been extensive criticism of the perceptions of its colonial past, France has not particularly been subject to criticism from its former colonies, with the exception of Algeria, and thus its colonial past has not been necessarily perceived as “negative” in France. The aim of this study was to elucidate how France’s perceptions of its colonial past have been shaped through focusing on Sub-Saharan Africa, a region that has been pro-France since before its independence, and by methodological approaches to social history.

研究分野：フランス植民地史

キーワード：歴史認識 フランス植民地 サハラ以南アフリカ 植民地史 帝国史 「黒人」認識

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、フランス史/ヨーロッパ史を植民地という角度から再考することで、支配の側の歴史像が再構築されるのではないかという問題意識をもってきた。従来の歴史の語りでは植民地にさしたる言及がなく、近代を切り開いた肯定的な側面に焦点が当てられるケースが多かったからである。近現代フランス史を植民地に視点を置いて通観したのは、その一つの成果である(『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002年)。

研究の過程で印象的だったのは、植民地支配の過去をめぐる歴史認識のありようが、日本とフランスで大きく異なる点だった。フランスでは植民地支配の歴史が「負」の価値をもつことに必ずしも合意がなく、肯定的な語り「修正主義」に直結するわけでもない。しかも植民地の側も、支配を受けるなかでフランスと敵対するというよりは、フランス本国人と同等の権利を求める傾向が顕著だった。このような状況をいくつかの事例から考察した論考8点をまとめた論集も上梓した(『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、2014年)。

植民地史の総体を通観するなかで、とりわけサハラ以南アフリカは特異な存在として立ち現れた。植民地時代から独立後の時代においても、他の植民地に比して親仏的傾向が強く表れていたのである。そうした事態に注目するのは、このような(旧)植民地側の姿勢が、フランスにおける歴史認識に大きな影響を与えていると考えられるからである。いずれの国も、「負」の過去をもっているであろうが、それをどのように捉え、どのように向き合うかは、その国を取り巻く様々な事情に左右されるのであって、画一的に負の過去が負の過去として受け止められるわけではない。いかに脱植民地化後の時代であれ、かつての被支配者からの異議申し立てがない状況で、主体的に過去に向き合うことはなかなか困難であろう。

フランスのように、旧植民地が親仏的で批判をさして受けない環境にあれば、それは歴史認識に直接的に反映されるのではないか。フランスの植民地化は「文明化」だと喧伝され、プラスの価値をもつものとして語られてきたことも合わせて考える必要がある。しかも独立後のアフリカ諸国は、他の地域にも増して旧宗主国フランスからの支援を必要としており、批判することが現実的ではない事情も考慮すべきである。

以上のような観点からサハラ以南アフリカを探求することは、植民地支配、あるいは植民地そのものの意味を、再考することにつながり、ひいては負の過去をいかに認識すべきかを普遍的に問い直すことにつながると考えられた。

2. 研究の目的

以上のような問題意識から、本研究ではフランス植民地のなかでもきわめて親仏的傾向が看取されたサハラ以南アフリカに注目し、植民地支配の過去をめぐるフランスの歴史認識を明らかにすると同時に、それが形成された背景を歴史的に考察することを目的とした。それを通して、近年盛んになっている各植民地・帝国史に、比較の視座を提供することもできると考えたからである。

より具体的には3点を目的とした。第一に、サハラ以南アフリカの親仏的姿勢の背景については、すでにある程度『フランス植民地主義と歴史認識』で検証していたが、「宗主国に近づこうとする心性」がいかに形成されたのかを、より具体的な事例から探ることである。この地は最終的には、インドシナやアルジェリアのように、戦争によってではなく平和裡に独立を達成するのであり、それも植民地時代からのこの地の姿勢と関係があったことは、前掲拙著でも触れている。ただしこの点の考察に当たって、第一次世界大戦前後の時期については、これまで十分に扱ってこなかった。本研究のような側面を探求するには、当然にしてアフリカ側にのみ原因を探るのではなく、宗主国フランスとの相互関係から考察する必要がある。とりわけ第一次世界大戦後には、現地のエリートの言動が突出して目に見えるようになる。その背後にどのようなフランス側の動きがあったのかを含め、大戦前後の時期を精査することは、今日の歴史認識を理解する大きな一助となると考えられた。

第二の目的は、サハラ以南アフリカの事情をよりよく理解するために、他の植民地、なかでもカリブ海の旧奴隷植民地を視野に入れることと設定した。この地の人びとの多くはアフリカをルーツにもち、外見的には「黒人」である。しかしこの地は独立の道は歩まず、1848年の奴隷制廃止以後、解放された奴隷(不十分ながらフランス市民とされた)は、本国と同等の権利を求め続ける。その努力は一世紀後の1946年に「海外県」という地位を得たこと、さらには1970~80年代に法制度上、本国と同じ権利を得たことで実を結んだ。対極にあると言えるこうした植民地の状況を参照することは、アフリカのありようを相対化して捉えることにつながるはずである。

第三に、「黒人」の居住する地域を考察の対象とする作業には、好むと好まざるとにかかわらず、「人種」の問題を考慮に入れざるを得ない。とくにカリブ海地域はアフリカを一つのルーツとしながら、アフリカ人とは異なる自己意識(ある意味では「優越感」)をも抱いている。そこにはヨーロッパで作り上げられた「人種観」が投影されているが、植民地ではそれが細分化され、重層的に再構築されていたと理解される。植民地史に取り組

んでいるときには、直接的な分析対象にしくとも、「人種」をめぐる問題はつねに底流に存在している。この論点を除いては、最終的な議論には行きつかないと思われる。

3. 研究の方法

本研究は、植民地史をめぐる「歴史認識」のあり方そのものを問題として設定し、それを探求するという方法をとる。そのため、植民地支配に関して政治・経済面での整理は基本状況を把握するために必要だが、その上でより人びとの意識・心性に分け入るためには社会史的アプローチが有効だと考えられる。本研究では、およそ次のような手順で研究を進めた。

まず本研究で軸としているサハラ以南アフリカについてフランスは、征服が本格化する帝国主義の時代以降、「精神の征服」を唱えていく。この地のいわゆる分割が完了し、第一次世界大戦が始まると、今度はこの地の「活用」が現実的課題として立ち現れてくる。そこで、そもそも探究の第一に掲げていた第一次世界大戦期について、精神の征服という観点からはアフリカの教育制度、植民地の活用という観点からはアフリカ兵の戦争への登用、さらに戦後の活用の一例として観光地としての整備をめぐる状況を取り上げた。アフリカ人への教育は、掛け声が大きい割に実質的にはさして制度化が進まないのだが、残されたアフリカ人向けの教科書などからは、とりわけフランス支配に有益なエリートの養成に関して、示唆的なものが読み取れる。本研究では、本国の子どもたちの国民意識を涵養するために使われた教科書に範をとって、アフリカの子ども用に翻案された教科書の一つの素材として用いた。

活用の面では、まずアフリカ兵の登用に至る前提、過程、実態を精査した。それに加えて大戦後にアフリカが観光地として整備されていく準備段階として、車会社シトロエンによるサハラ砂漠縦断、アフリカ大陸縦断の二つのミッションに注目し、広くフランスの一般の人びと（大衆）の目にアフリカがどう開かれていったのかを検証した。クロワジエール＝クルージングと称された以上のシトロエンの「冒険」は、当時、国民的話題となり、人びとの意識を植民地に大きく開いていたものである。これはアフリカ人の精神を征服していったこととは反対に、本国の人びとの精神をいわば肯定的な明るい植民地観へと導く役割も果たしたと考えられる。

さらにその過程におけるアフリカ人の対応から見ても、支配の現場が必ずしも支配/被支配という二分法で語られうるものではないことが看取される。このような素材を取り上げたことにより、植民地と本国の相互作用がこうして意識の形成にも及んでいる一端を明らかにできた。

以上の作業に次いで、二つ目の目的に掲げたように、他の地域との比較検討を試みた。なかでもアフリカ人が送られた奴隷植民地に注目するのは、意義あることと考えられた。奴隷植民地をめぐるのは、奴隷制時代から時間をかけて作られた「自由の国フランス」という表象に切り込んだ。この表現は1848年の奴隷制廃止の政令にも織り込まれたものだが、こうしたイメージが本国フランスのみならず、奴隷植民地でもいかにして分かち持たれるようになったのかを、法制度や後の時代の裁判を通して読み解く手法をとった。

4. 研究成果

本研究の課題として、第一次世界大戦をめぐる考察は大きな位置を占めていたのだが、想定していたよりもずっと早く一書にまとめることができた。それまで大戦研究と関連づけて考えていなかった史料や知の蓄積が、作業を進めるなかで、実は第一次世界大戦に密接に関連する主題であると諒解されたこともあり、結果的には効率よくそれらを集中させることができたためである。とりわけシトロエンのクルージングについては、日本語で書かれたものはまだない状況でもあり、第一次世界大戦期の植民地について社会史的に探求するなかでも、独自のものを示せたと思う。さらに教育に関しても、フランスで極めて広範囲に、また長期にわたって読み継がれた『二人の子どものフランス歴史』をアフリカ人向けに書き直した教科書を、史料として有効に活用することができ、大きな意味があったと考えられる。

これに次いで奴隷制時代のフランスが、肌の色の黒い人びとが本国に到来するのをどう統制しようとしていたか、その背後で「自由の国」フランスという概念がどう形成されたかを考察した論考を公刊した。代表者はこれまで近現代を中心に研究対象としてきたが、このテーマに関しては近世以前にまで視野を広げることになった。日本のフランス近世史研究においては、従来テーマとして認識されてはならず、いわば盲点となってきた論点を提示できたのは大きな成果であった。ただサハラ以南アフリカに注目する立場からは、ここで活字にした論考に続く考察がさらに必要となる。今後取り組むべき課題の大きな足掛かりともなったことを記しておく。

加えて、当初は予定していなかった依頼の仕事もあり、小さなものの積み重ねが助けになることは意外に多かった。なかでも最後の成果となったアジア・ヨーロッパの様々な地域の歴史認識を比較考察した論文集に寄せた論考は、本研究にとっても有益となった。フランスでは近年、負の歴史にまつわる「記憶」を法制化する動きが相次いだ。今日「記憶法」と総称されるそれらは4つを数えるが、

そのなかに一見、植民地にはかかわりのないアルメニア人虐殺（第一次世界大戦中にオスマントルコ帝国で起きたとされる）に関する法がある。「記憶法」を取り巻く状況を検証するにあたり、フランスには直接関係しない外国の事例と考えられてきたアルメニア人についての議論を加えることで、最終的には誰を国民に含め誰を排除するかという観点から事態を読み解くに至った。これは、植民地にまつわる歴史/記憶を考える上で重要な視角となった。想定していなかった視点だが、そうした異なる事象を参照することが、サハラ以南アフリカをめぐる議論を、より広い場において検討することにつながったのは、重要な成果だった。

本研究の問題意識を組み入れたフランス史の通史（大学生・一般読者向けの教科書）の刊行も準備が進んでいる。この点も合わせて記すたいである。

なお目的の第三に掲げた人種については、十分深めるに至っていないが、本研究に続けて新たな科研費研究の資金を得ることができた（基盤研究C「フランスにおけるもう一つのマイノリティ 黒人、国民史、歴史認識」2018～2021年）。共通する問題意識に基づく研究であり、本研究で得られた知見をさらに発展させた成果を得るにあたり、この論点は大きな位置を占めることとなるはずである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- 1、平野千果子（報告書）「ナポレオンと植民地 反乱・奴隷・女性」、中央大学社会科学研究所シンポジウム「理論研究」チーム「ジェンダー・暴力・デモクラシー」報告書、査読無、2018年3月、10～16頁
- 2、平野千果子（書評）小川了著『第一次大戦と西アフリカ フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』（刀水書房、2015年）『社会経済史』査読無、第82巻第3号、2016年11月、159～161頁
- 3、平野千果子「奴隷制時代のフランスにおける「黒人」 見えないものから見えないものへ」『歴史学研究』査読無、第946号＜特集 不在の歴史学＞、2016年7月、55～65、78頁
- 4、平野千果子（書評）松沼美穂著『植民地の＜フランス人＞ 第三共和政期の国籍・市民権・参政権』（法政大学出版局、2012年）『歴史学研究』査読無、第944号、2016年5月、42～46頁
- 5、平野千果子（報告書）「植民地支配の過去と歴史認識 フランスの事例から」第15回日韓歴史化会議報告書「植民主義と脱植民主義 世界的視野から」日韓文化交流基金、

査読無、2016年3月、153～161頁

- 6、平野千果子「国民国家と植民主義 最後の海外県マイヨットを手がかりに」『立命館言語文化研究』査読無、第27巻第2号、2015年10月、159～174頁
- 7、平野千果子（時評）「シャルリ・エブド襲撃事件とフランス 報道から考える現代社会」『歴史学研究』査読無、第936号、2015年10月、36～44、64頁

〔学会発表〕(計 5 件)

- 1、平野千果子「ナポレオンと植民地 反乱・奴隷・女性」中央大学社会科学研究所シンポジウム「ジェンダー・暴力・デモクラシー」、2018年2月3日
- 2、平野千果子「フランス植民地周遊 支配の過去と歴史認識を問いながら」東京学芸大学史学会講演会、2017年1月30日
- 3、平野千果子「植民地支配の過去と歴史認識 フランスの事例から」第15回日韓歴史化会議、2015年11月7日
- 4、平野千果子「現代フランス社会の隘路 シャルリ・エブド襲撃事件から考える」金沢大学文化祭講演、2015年11月1日
- 5、平野千果子「国民国家と植民主義 最後の海外県マイヨットを手がかりに」立命館大学言語文化研究所連続講座「西川長夫 業績とその批判的検討 第5回 植民主義論の射程」2014年10月31日

〔図書〕(計 7 件)

- 1、平野千果子「フランスにおける植民地支配の過去と記憶 法制化をめぐる議論から」橋本伸也編『紛争化させられる過去 アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』岩波書店、2018年、全318頁（85～107頁）
- 2、平野千果子「帝国主義 植民地再分割へ戦火拡大」「南仏の観光地フレジュス」藤原辰史編『第一次世界大戦を考える』共和国、2016年、全269頁（47～49、107～111頁）
- 3、平野千果子「フランスの黒人人形と植民地主義 パリの人形博物館を訪ねて」香川檀編『人形の文化史 ヨーロッパの諸相から』水声社、2016年、全338頁（249～254頁）
- 4、平野千果子「移民のヨーロッパ」南塚信吾・高澤紀恵・秋田茂編『新しく学ぶ西洋の歴史 アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、全420頁（366～367頁）
- 5、平野千果子「もう一つのグローバル化 フランコフォニー創設の軌跡をたどりながら」近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年、全243頁（205～223頁）
- 6、平野千果子、総説「ヨーロッパ戦線と世界への波及」第3節、山室信一・小関隆・岡田暁生・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦』第1巻、岩波書店、2014年、全256頁（42～46頁）
- 7、平野千果子『アフリカを活用する フランス植民地からみた第一次世界大戦』（レ

クチャー、第一次世界大戦を考える)人文書
院、2014年、全166頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平野 千果子 (HIRANO, Chikako)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00319419